

2019年度 日本語教育実習 最終レポート

日本語教師はとても簡単だと、最初は思っていました。なぜなら「先生」は、今までの生活の中で、一番馴染みのある職業からです。当然、分かりやすい先生もいれば、分かりにくい先生もいました。しかし、なぜそのような差が生まれるのかは、考えたことはありませんでした。一年生の日本語教育方法論の授業で、機械的ドリル、ペアワーク、ロールプレーなどについて習いました。それぞれの目的、注意点があって、とても難しく感じました。いい授業を作るには、学習する内容を考えるだけでなく、学習者を理解すること、教師の言動、教材と学習環境などについて勉強して、いろいろ気を付けなければならないことがあることを知りました。今までに学生の立場で見えていましたので、先生たちの工夫には気づきませんでした。その時に、日本語教師はただ日本語が話せれば誰でもなれるわけではない、ということが分かりました。

その学期末に、日本語授業を分析するという課題がありました。授業から三つの場面を選んで、それについて説明しました。例えば、一つの場面は、機械的ドリルの反復練習（教師がある形を発話して、学習者がそれをまねて反復する練習）でした。「機械的ドリル」の目的は、学習項目としての文型を、文法的に発音の面でも正しく言えるようにすることです。そして学習者たちの様子で、目的と実現方法が一致しているかどうかを判断します。また授業全体を通して、先生の言動についての分析もしました。たとえば、授業中の立ち位置、グループ活動をする際に先生の行動、学習者たちの発言に対してのフィードバックなどに注目しました。以前は決してこのように細かく分析することができませんでした。一学期の勉強を踏まえて、他の日本語教師の授業についていい点とよくない点について気づけるようになりました。そして、いい点を勉強して自分の授業で生かせることと、よくないところを注意して自分はそうしないように気を付けることが重要であることを知りました。

後期の授業では、前期の内容を踏まえて、実際にグループを分けて模擬授業をしました。実際に日本語の授業で立ち位置、指名、教材と小道具などについて、注意すべき点を学びました。そして、これらの知識を使って、グループで模擬の授業も行いました。模擬授業では、指名がとても難しく感じました。順番に当てないことと、指名する前に先に質問をいうことを頭に入れて授業をするつもりでしたが、実際に教壇に立つと緊張してしまい、うまくいきませんでした。模擬授業を通して、日本語教師という仕事について、もっと考えるようになりました。

三年生では、教育実習をしました。前期の教育実習授業では、中国からきた学生たちに教えました。初めての授業で、すごく緊張しました。二年生の後期に留学した関係で「日本語教育方法論演習2」を履修していなかったため、不安なことがたくさんありました。教案の作りも同じグループの友達と協力し合い、一緒に作りました。最初の授業の準備で戸惑ったことがたくさんありました。それは、(1) ロールプレーのテーマにつなげるウォーミングアップを思いつかなかったこと、(2) 学生たちのレベルを把握していなかったため、どのよ

うな言葉が難しく、説明しないとイケないのかが分からなかったこと、(3) ロールカードに書いてある状況を把握してもらえるようにするには、どういう風に説明したらいいかが難しかったこと、(4) どのような教材を作ればいいのか分からなかったこと等でした。そして本番の授業の時も、いろいろ戸惑いがありました。例えば、ロールカードに書いてある状況を理解させるため、音読させました。しかし、学習者たちは発音に精一杯で、内容があまり頭に入らなかったようで、理解していませんでした。「今まで勘違いしたことがありますか」と質問しましたが、二人から「ないです。」と答が返ってきて、困惑しました。会話も思ったように続きませんでした。ロールプレーで準備した表現を一つずつ黒板に書くのにも、とても時間がかかりました。授業の後は、皆でCDを見て、反省会をしました。準備と本番での戸惑いに対して、先生からたくさんアドバイスをもらいました。

- ①ウォーミングアップに関して、その状況を説明する長文を読ませるのではなく、その状況を演じたほうがいい。ジェスチャーや表情などの非言語的な言葉を使って、理解してもらいべきである。
- ②言葉の意味をどれくらい分かっているかを確認するため、学生さんに説明してもらう。
- ③ロールプレーで使う表現のように、絶対に使うものを授業前に準備することが大切。
- ④学生の話を引き出すために、先に自分の話をする。
- ⑤ロールプレーで使う言葉を教えた後、ロールプレーの説明文と一緒に読んでもらう。
- ⑥ストレートに教えるよりも、「この時どういう風に言うと思いますか」と質問して、学生たちに考えさせる。

二回目と三回目の授業で、できたこともたくさんありました。

- ①教材の準備をしましたので、慌てて黒板にかかなくて、スムーズに説明ができました。(アクセントの位置をわかりやすく見せました。)
- ②文のヤマの数を変えて、一つずつ練習をしましたので、学生たちにヤマの違いを聞き取ってもらうことができました。(前回の発音を担当するメンバーの反省により)
- ③難しい発音があるとき、CDを繰り返して聞かせることによって、気付かなかったことに気付いてもらえました。
- ④問題文(○×など)の説明で、例を挙げることによってうまくできました。
- ⑤ウォーミングアップは教科書通りにせず、自分で考えたものを準備してきました。そして、学生たちはそれについて興味がありました。
- ⑥フィードバックは最初の授業よりスムーズにできました。以前より学生たちの誤りに敏感になったと思います。
- ⑦ふさわしい言葉を教える前に、先に学生たちに質問するようになりました。

- ⑧教えるだけでなく、習った文を練習させました。
- ⑨学生とコンタクトを取りながら授業することができました。
- ⑩板書は以前よりきれいになりました。
- ⑪授業中でどういうものがあったら教えやすいかを自分で考えられるようになりました。
- ⑫意識して、声を大きく、明るい雰囲気を作りました。

このように一回一回の反省で、自分の足りない部分が見えてきました。そしてその次の授業に役に立ちました。経験の積み重ねで、授業はどんどん良くなるのです。

後期の実習は、YMCA の学生に対して授業を行いました。前期との違いは、学習者の人数とレベルです。人数は二人から二十人になり、レベルも上級から初級になりました。後期の授業準備で一番大変だと思ったのは、ティーチャートークを考えることでした。初級なので、簡単な日本語で新しい言葉を説明する時や指示を出す時に使う言葉を考えなければならず、それがとても難しかったです。文章を変えたり、ジェスチャーや演技で説明したりするといいと、先生からアドバイスをもらいました。例えば、「このケーキはだれに食べられましたか」を「誰がこのケーキを食べましたか」に変えます。「教科書を出してください」という指示をしながら、教科書を出してみせます。

授業の内容も前期より多いので、教材の準備も大変でした。最初は、字の大きさしか考えていなかったため、フリガナを付け忘れ、スムーズに使えませんでした。二回目と三回目の授業の準備では、教材を作っただけでなく、それを使って何回も練習しました。使いにくいと思ったら作り直しましたので、本番の授業でスムーズに使うことができました。授業の時間配分も難しかったです。一回目の授業では、思ったよりスムーズに進んだので、2、3分くらい時間が余りました。余った場合にすることを考えていましたが、時間を確認し忘れたため、何もませんでした。二回目と三回目の授業では、時間に気を付けて、時間調節ができました。

この三回の実習授業で自分の言動もいろいろ変わりました。黒板に向いて話さないように気を付けて、学習者たちとアイコンタクトを取れました。立ち位置も前よりよくなりました。笑顔で、大きい声を出すのもできるようになりました。この一年間の実習で、授業に向けての準備と本番を経験して、日本語教師についてよりよく理解しました。そして、教案、教材を自力で作れるようになりました。より良い授業を作るため、他の先生の授業を分析してよい点を自分のものにすることと、自分の授業を毎回毎回振り返って反省することが大切だと分かりました。

将来は中国で日本語の教師になりたいです。面白くて、わかりやすい教師になりたいです。ただ教科書通りに授業を進めず、いろいろ新しい活動を考え出して、学生たちを退屈だと感じさせないようにしたいです。しかし、基礎もしっかりと定着させないといけないので、この三年間で学んだ導入方法、機械ドリル練習、ペアワークなどを使って、一つ一つ定着させ

たいと考えています。そして明るい雰囲気を作るため、自分の表情、声などをもっと練習しなければなりません。一番苦手なアクセントとイントネーションも、もっと勉強しないといけません。そしてプロの日本語教師の授業を分析して、よいところを勉強し、自分のものにできるように練習します。さらに、学んだことを学生の実情に合わせて応用できるように頑張りたいと思います。